

人のつながりを再興する

—スマトラ沖地震による大津波の タイ被災地における図書館事業の実践から—

松尾久美

一・はじめに

スマトラ沖地震による大津波の被害を受けたタイ南部パンガー県において、シーカー・アジア財団（公益社団法人シヤンティ国際ボランティア会）のタイ現地法人、以後SAFと略す）が実施した支援活動を振り返り、その軸となった図書館活動の地域復興における意義を考えたい。SAFは、二〇〇四年末の津波発生後、二〇〇五年から二〇〇七年まで三年間、現地事務所を設置し、事業運営の拠点とした。この三年間の事業について被災者の生活形態の推移による三つの期間に分けて述べていく。まず、被災直後からの一カ月間を緊急避難期、次に、二カ月目からの約一年間を仮設住宅期、最後に、二年目からの二年間を復興住宅期とする。

二・緊急避難期、被災直後の心の傷をいやすー移動図書館の活動ー

被災当日から三日目、現地入りしたスタッフが目にしたのは、津波のすさまじさを物語る光景だった。家や木はもろろんのこと、大きなリゾート施設までもがなぎ倒され、がれきの山と化している。タイ最大の被害を受けたパンガー県ナムケム地区の近くの寺には、所狭しと並べられた遺体と、遺体を棺に収容するボランティア、そして、必死に遺族を探す家族たちの姿があった。言葉を失うような状況のなか、ニーズ調査を開始し、まずは、当時、不足していた大型テント、貯水タンク、学用品などの救援物資の配布を決定する。被災当日から九日目、各避難所に救援物資を届ける一方、支援状況を確認する。タイ国内外で注目を浴びた大津波のニュースの影響により、比較的早い段階で救援物資の量的確保は整いつつあった。緊急災害時に『衣食住』の保障がひと段落した後、次に、必要な心のケアである。SAFでは、カウンセリングなどの専門的ケア

を浴びた大津波のニュースの影響により、比較的早い段階で救援物資の量的確保は整いつつあった。緊急災害時に『衣食住』の保障がひと段落した後、次に、必要な心のケアである。SAFでは、カウンセリングなどの専門的ケア

はできないが、長年の経験を持つ分野で、子どもたちをはじめ、おとなたちにも、少しでも元気になるため『移動図書館活動』の実施を決めた。被災から二週間後、絵本が詰まった移動図書館車で、各地の避難所および保育園、小学校を訪問する。一方所につき、約二時間、三人のスタッフでお話しの活動を進める。手遊びやダンスなどの気持ほぐしから始まり、絵本の読み語り、人形劇と徐々にお話しの世界に浸ってもらえるような工夫をしている。最後には、お話を聞いて楽しんだ子どもたちが今度は



避難所での移動図書館活動（瀬戸正夫氏撮影）



被災した小学校での移動図書館活動（瀬戸正夫氏撮影）

移動図書館車のなかの絵本を自由に選んで読む時間となる。ある幼稚園でのこと。二歳くらいの女の子がぼつんと座っていた。先生によると津波で母親を亡くし、それ以降、誰とも話さなくなり心配しているとのこと。しかし、活動が始まるとすぐ、隣にいたスタッフの膝の上にあがりニコニコしだした。人形劇になると、パペットに夢中で話しかけ始めた。それを見た先生は目頭を抑えていた。お話しの世界を楽しむ周囲の雰囲気になんか安心できたこと、パペットという心を開きやすい媒体があつたことにより、女の子の心が動いたと考えられる。避難所においては、小さな子から、大きな子までが、一緒に楽しんで姿がみられた。

さらに、子どもたちの笑い声につられて集まってきたおとなたちが、子どもたちの屈託のない笑顔を目にして、束の間の心の平穏を得る機会ともなっていた。この時期の活動は、状況が飲み込めないまま茫然としている子どもたち、悲嘆に暮れているおとなたちが一時的にお話しの世界に浸ることに、不安やストレスなどから、一旦、距離を置くことで、精神的ダメージを軽減させようとする試

みであった。

三、仮設住宅期、復興への端緒となる『つながり』の場をつくるー仮設図書館の活動ー

被災からの一年間は各避難所において、テントから仮設住宅への生活へと移行していった時期であつた。SAFは被災後一カ月に満たない頃から避難所に大型テントの仮設図書館を設置した。場所はバンムアン避難所。津波被害の著しかった漁村ナムケム村の被災者およそ九〇〇家族、三五〇〇人が生活する避難所で、国内で最大の被災者を抱える。数百のテントがひしめきあい、あちこちで干き



仮設図書館のテントで、真ん中が筆者

れた洗濯物が風に揺れているのが印象的であつた。

仮設図書館は大きなテントを二つ並べただけの簡単な造りだった。床には黒いビニールシートを敷きつめた高さ三〇センチほどの木組みの台を使用した。活動はSAFが運営する子ども図書館を模しており、図書の貸し出しサービス以外に、絵本・人形劇などのおはなしの活動や、手遊び・工作・ゲームなどのレクリエーションを提供する。

やって来る子どもたちは、表面的には明るく振舞っていても避難生活でのストレスや災害時のトラウマなどを内面に抱えている可能性が高い。図書館スタッフは、子どもたちの気持ちに寄り添うことを旨とした。気になる子どもがいた場合も、災害時の状況および亡くなった家族について、特に尋ねたりせず、話したいという子には耳を傾けるという立場をとった。あくまでも子どもたちが安心して楽しむことのできる環境づくりが目標であつた。

平日、避難所の子どもたちが学校から帰ってくるのは夕方四時ごろ。常連の子どもたちは家にカバンを置いてすぐに駆けつけてく

る。絵本を読むため、あるいは活動に参加するためという目的のみではなく、そこが安心できる自分の居場所となつてきているようだった。よい図書館をつくるうえで最も重要な要素は、何といつても人

である。子どもたちが毎日、図書館に訪れるのは、そこに自分を迎える人がいるからであり、おとなたちが折に触れ訪れるのもそこに自分を知る人がいるからだろう。本事業では、早くから現地の住民を図書館スタッフとして登用し、バンコクから派遣したSAFの図書館スタッフが指導に当たる形をとった。このように採用したスタッフは子どもたちと同じ境遇であることがモチベーションとなり、精神的に活動をする者が多く、子どもたちにとっては親近感のもてる存在であるからだ。さらに、被災者でもある彼らにとって、自分が他者の助けになる立場になることでエンパワーされるといふ効果も期待した。この方法は功を奏し、子どもを対象にした団体がいくつもあるなか、SAFの仮設図書館では子どもたちとスタッフとの関係の親密さが特徴となつた。

仮設図書館は徐々におとなの交流の場にもなっていく。子どもの

送り迎えや新聞を読むために短時間でも立ち寄ると、自然に同じ立場の人と会話を交わすこととなる。お互い避難所で生活をしている者同士、情報交換をしたり、愚痴をこぼしたりする姿が日常的にみられるようになった。さらには、

より積極的に図書館活動に参加してくれる、おとなたちの存在も出てくる。イベントの際に食べ物差し入れをしてくれるお母さん、楽器や工作を教えてくれるお兄さん、お姉さんがいた。津波以前、リゾートの家具を作っていた職人さんもその一人だ。一流職人さんからの立派な家具の差し入れは、テント図書館を見違えさせた。靴箱や整理棚のような実用的なものから、少し場違いともいえる素敵なロッキング・チェア（揺り椅子）まで、何でも作ってくれた。このロッキング・チェアが、子どもたちが順番待ちの列をつくるほどの人気者になったのはいうまでもない。これには少し裏話がある。津波の発生当時、お棺の不足が深刻化し、支援団体の多くが急ぎ作成したところ、今度は大量の余りがでてしまった。彼はその余った木材を有効利用していたのだ。この職人さんは、のちに建設すること

になるコミュニティ図書館の家具もすべて格安で手掛けてくれた、本事業の立役者ともいえる存在である。彼も、家具作りを通して子どもたちや地域への貢献をするこゝとでエンパワーされた被災者の一人といえる。

このように、図書館にそれぞれの立場や役割で集うことで、お互いに支えあう場を提供したのも、この時期の図書館活動の特徴であった。当初、子どもの居場所づくりを企図した図書館が、被災住民のセンター的な役割も果たすこととなっていくのである。この点で、復興支援への移行期において常設のコミュニティ図書館を設置するという展開を自然に導いたと考えられる。

四、復興住宅期、人の『つながり』を再興するーコミュニティ図書館の建設から

行政への運営移管までー復興支援としての図書館建設は被災直後から計画にあったわけではない。テント図書館での活動が子どもの安全な遊び場であるとともに、おとなも安らげる交流の場であるとして支持を得たことが、その実現を招いたのだ。

津波発生から八カ月たったころ、復興住宅への移行は目の前となってきた。住民および行政は、新たなコミュニティ形成において必要な施設リストのなかに、広場、保育施設などと並んで、S A Fの図書館を挙げた。S A Fは、将来的に地域行政による運営維持が可能であることを確認したうえで、建設を決定する。さらに、住民、行政、教育関係者などからのニーズ調査および協議を経て、いよいよ図書館の建設が始まった。新しい図書館へ結集された想いは、『これから何十年と使い続けていける図書館』、『知識獲得の場のみならず、子どもと地域の人々すべてにとって安らげる居場所としての図書館』、『津波という想像を超える大災害に見舞われたこの地域が復興していくきっかけとなるような図書館』だった。

復興を支えるためのコミュニティセンターである図書館を目指し、人が自然と集まるような居心地の良さを重視した。そして、テント図書館のころから関わられていた、地域の職人さんによる温かみのある木製家具を備えた手作り図書館が完成する。行政関係者、地域の有力者などが参列した



復興住宅群の敷地内に建設されたコミュニティ図書館の外観

盛大な開館セレモニーを終えて、新しい本が迎える館内に目をキラキラさせた子どもたちがどっと押し寄せた。かじりつくようにしてあちこちで本を読む子どもたちの姿に目を細める住民たち、この光景は忘れられないものとなった。

開館してしばらくすると他の地域や学校からの視察や図書館活動の技術指導に対する要請が来るようになり、地域行政および住民リーダーの誇らしげな表情が見られるようになった。開館後二年間の移行期間を経て、S A Fは地区行政に対して運営を移管した。二〇一三年現在、今は地区行政の職



コミュニティ図書館、親子で絵本を楽しむ様子

員となった、テント図書館時代からの現地スタッフがコミュニティ図書館を元気に切り盛りしている。図書館建設に至る住民の参加意識の高まり、さらに行政による図書館運営の継続を実現させた、地域の集合体としての力の発露。これらより、復興支援としてのコミュニティ図書館設置における一連の流れが、人と人がつながっていくコミュニティの再興を促進する一助となったことは間違いないだろう。

五. おわりに

S A F の実施した津波被災地における支援事業は、強みである図書館の活動を活かしつつ、各時期

の被災者の状況に応じて柔軟に取り組みを工夫してきたものと振り返ることができる。初期における移動図書館活動による個に対する精神的ダメージの軽減、中期における仮設図書館の設置による個と個のつながりの場の提供、そして、コミュニティ図書館の建設・運営移管による集合体としてのつながりを再興する機会の提供がそれである。大災害により、かけがえない家族を始め、大切な暮らしの基礎を打ち砕かれるという、深い悲しみを負ったコミュニティが、新たに活気ある個々を内包する集合体として機能していくことを最大の目標とし、被災住民の、その時々への気持ちに寄り添うことでしか事業を進められないと悟った結果であった。災害後の復興の際に必要なとされることは居住空間の再建および職の保障など、多くあるが、一旦、個と個に戻った人同士が、再度、関わりを持ちなおし、新たな集合体として機能していくことが、人が活きる復興といえる。S A F の実施した図書館による支援は、新たな集合体に必要な、人のつながりを再興するためのものであった。

(まつお くみ/タイの教育支援N
GO『マレットファン』)